

流出・出稼ぎ、ブラマン(Brahman, 最上級のカー  
スト)の都市部への流出, 非農業部門の雇用機会の  
増加などによる労働市場の需給均衡の変化と, 国際  
市場へのインドの農産物のアクセスと肥料の流入な  
どによる農業生産の集約化に起因するものであった。

(3)植民地の期間にみられる南インドの農村社会  
や農業経営, 地主小作関係などの変化は, 18世紀か  
ら20世紀にかけての日本の経験と比べてみると,  
農村工業化の度合や農業技術変化の速度と性質など  
に違いがあるものの, 労働慣行や農業経営の規模,  
農業経営の形態などの変化の方向に関しては類似す  
る点が多い。

(4)独立後のインド農村社会の変化は, 基本的に  
独立前の期間に生じた変化の継続であり, 1960年代  
に起った緑の革命はこの傾向を強めたものに過ぎな  
い。

農地登録の記録や集税の記録, 行政府のその他の  
レポート, 農家へのインタビューなどに基づいた著  
者の分析は実に丁寧できめ細かい。本書を読むと,  
植民地下の南インドの社会の生々しい息づかいが聞  
こえてくる。停滞と思われがちなこの時代のインド  
社会は, 実は, 物と人の需給関係の変動によって変  
化に富むものであったことがよくわかる。過去の事  
象をこのようによく再現することができたのは, 取  
集資料の膨大な分量に加え, 適切な分析手法が採ら  
れた理由にある。私が特に関心を持ったのは, 2時  
点間の比較に際して, 経営規模分布や小作面積, 土  
地なし労働者の数などの変動だけでなく, それぞれ  
の項目に占めるカースト毎の比率の変化を比較したり,  
また時に個人農家の歴史にまで追跡したりする  
分析手法である。この方法は, インドのように社会  
構造が複雑な地域の分析には非常に有効である。

本書は農村社会に関する研究書物として実に力作  
であり, 時間をかけて読むに値するものと思われる。  
以下, 本書へのコメントとして2点を記しておきたい。

1つは, 独立前期にみられる, 農業経営が家族経  
営に集中していた傾向の理由として著者は, 労働供  
給の過剰状態の緩和と国際市場へのインドの農産物  
のアクセスの改善に加え, 農業経営の集約化の進展  
をあげている点についてである。この部分について  
の著者の説明はかならずしも充分とは言えない。こ  
の時期の生産要素市場では, 本書から次に述べる大  
きな出来事があったと推察される。

(1)農外への労働流出

柳 沢 悠

### 『変動の一世紀』

——タミルナードゥにおけるカーストと灌漑地,  
1860年代~1970年代——

Haruka Yanagisawa, *A Century of Change :  
Caste and Irrigated Lands in Tamilnadu 1860s-  
1970s*, New Delhi : Manohar 1996, pp. 323.

本書は, 1860年代から1970年代までの期間にお  
ける南インド Tamilnadu 地域の農村構造の変化と  
その要因を明らかにする目的で書かれている。B5  
版323ページにわたるその内容は, 第1章: 既存研  
究のレビューと仮説, 第2~6章: 独立前の期間の  
分析, 第7章: 独立後の期間の分析と第8章: 結論  
に2つの付録を加えた構成, となっている。

章だてからも読み取れるように, 分析の範囲は独  
立前と独立後の両期間を対象にしているが, 分析の  
重点は, インドがイギリスの植民地下におかれてい  
た期間の農村社会の変化にある。分析の結果は次の  
4点に要約される。

(1)最下級のカースト(depressed caste)の経済的,  
社会的地位は, 徐々にではあるが, 植民地の期間を  
とおして, 地主に従属した終身奴隷の身分から日雇  
い労働者や小作人, また時には農地保有者へと改善  
がみられる。この傾向はその他の非ブラマン階層  
(non-Brahman castes)においても確認される。

(2)南インドの農村社会にみられた上記の変化は,  
主に, 非ブラマンおよび最下級カーストの海外への

## (2) 肥料と灌漑水の供給の増大

農外への労働流出は、農村部での労働供給の過剰状態を緩和させ、実質賃金の上方シフトを引き起こす。その一方、肥料と灌漑水の供給の増大は、一般に土地を節約し(単収の増大による土地の希少性の減少)、労働をより多く使用する(多毛作化、単収増などによる労働需要の増大)といった性質があり、労働集約的な技術変化を引き起こすものと解釈される。土地と労働の座標で描かれる等量曲線を念頭において考えると、初期の技術水準を表わす初期の等量曲線の下で、農外への労働流出によって実質賃金の上昇が生じ、労働と土地の比率はより低い水準へ移動する。この移動は、労働の農外流出がもたらす短期の作用を表わす(以下、これを要素価格変化の短期効果と呼ぶ)。その一方で、肥料と水の供給の増大は労働投入量の増大をもたらし、よって労働・土地の座標で描かれる等量曲線は労働軸の方向へシフトする。これによって、同じ土地・労働の相対価格でも均衡点はより高い労働・土地比率へ移動する。この変化は、経常財の供給の増大が生み出す効果を示す(以下、これを労働集約的な技術変化と呼ぶ)。この2つの作用に加え、長期的には、労賃の上昇により労働節約的な技術変化が引き起こされる可能性、すなわち等量曲線が土地軸の方向へシフトすることも考えられる。

戦前期の日本農業においては、夏秋蚕の技術普及などにより土地と労働ストックの年間稼働日数が増加することなどにみられるように、農業経営の集約化、すなわち労働集約的な技術変化は広く知られている。また、1915年ごろに、農外への労働流出や肥料供給の増大などによって生じた要素価格の変化への対応として、短期的には労働・土地・肥料の間での代替効果が起り、また長期的には労働節約のバイアスをもつ技術変化(労働の農外流出が労働賃金の上昇をもたらし、それによって誘発される技術変化)が生じたことも確認されている<sup>1)</sup>。

本書の情報からは、おそらく南インドの農業において、調査対象の期間に、労働・土地の相対価格の変化に対応する要素の代替と、経常財の供給増大に伴う経営集約化の傾向は現実には起ったが、労働節約のバイアスをもつ技術変化はまだ顕著になっていない、と推測される。日本の経験との厳密な比較を行うには、分析対象の期間における南インドの単位面積の収穫量や労働投入量などについての細かい統計資料の収集、緻密な分析が望まれる。

いま1つは、低い階層の人々がうまく1つの強い勢力に結集できるか否かが農村構造とりわけ地主小作関係の変革にとってきわめて重要な要素であると書かれている点(第8章、結論)である。このことは、はたして本書の事例研究から言えるかである。本書を通読して、私はむしろ、独立前の期間において、労働の需給均衡や市場へのアクセス、工業化といった経済の要因が古い労働慣行や地主小作関係の変革にいかにか大きく貢献したかとの印象を強く受けている。たしかに勢力の結集をもった農民運動が盛り上がった時期には農村社会に変革がみられたが、同じ時期に労働者の立場を強める経済的要因もみられている。私は、農民運動の盛り上がり、農村社会の変革を生み出した原因よりも、経済的要因によって誘発された出来事とみる。というのは、低い階層が自分たちの利益を獲得するために勢力を結集しようとしても、低い階層にとっての好都合の経済状況がなかったならば、この努力は失敗に終わってしまうからである。

## 注

1) レ・タン・ギエップ「戦前期日本農業の技術構造とその変化」『農業経済研究』第39巻第3号(1977年)を参照。

2) 城西国際大学人文学部。

[レ・タン・ギエップ<sup>2)</sup>]